

—清方の情趣—秋・冬の巻

昭和7年に明治神宮聖徳記念絵画館の壁画として制作された「初雁の御歌」の小下絵をはじめ、秋から冬の清方の情趣を紹介した。

会期 平成13年11月23日(金)～平成13年12月20日(日)(開館日数:24日)

総入館者数 2,428人(一日平均:101人)

出品作品

「虫の音」「ほゝづき」「孤児院」「秋宵」「暮れゆく沼」「太夫」「二人静」
「栗をむく娘」

口絵:「あさ露」「勝鬨(渡邊霞亭著『勝鬨』)」「小ゆき(菊池幽芳著『小ゆき』)」

「こすもす」「新鬢下地(小栗風葉著『新鬢下地』)」

「恋学生(小栗風葉著『恋学生』)」

「菊花節(下絵)」「たけくらべの美登利(下絵)」「初雁の御歌(小下絵)」

関連記事:

平成13年11月15日/12月1日・15日 常設展「清方の情趣—秋・冬の巻—」(広報かまくら)

平成13年12月15日 鐺木清方記念美術館 常設展「清方の情趣—秋・冬の巻—」

(エリア湘南よみうり)



リーフレット

特別展・寿新春 —羽子板展—

清方の作品「明治風俗十二ヶ月」をもとに、永井周山により制作された羽子板を展示した。

会期 平成14年1月5日(土)～平成14年2月11日(月・祝)(開館日数:33日)

総入館者数 4,663人(一日平均:141人)

出品作品

| | | |
|----------------------------|-----------|-------|
| 「鐺木清方意匠年賀状 風景(家影)」大正6年 | 14.0×9.0 | 個人 |
| 「鐺木清方意匠年賀状 龍」 | 14.2×8.8 | 個人 |
| 「鐺木清方意匠年賀状 兎」大正4年 | 14.2×9.0 | 個人 |
| 「鐺木清方意匠年賀状 猿」 | 14.3×9.1 | 個人 |
| 「鐺木清方意匠年賀状 風景(松に雪)」大正11年頃 | 14.1×9.0 | 個人 |
| 「美人四季 新春の粧(春)」昭和25年 絹本着色 軸 | 56.5×54.0 | 富士美術館 |
| 「美人四季 山百合(夏)」昭和25年 絹本着色 軸 | 56.5×55.0 | 富士美術館 |

「白梅」「明治風俗十二ヶ月(押絵羽子板 永井周山)」「ためさるゝ日(押絵羽子板)」

「春の夜のうらみ(押絵羽子板)」「元日の朝(口絵)」「立見十二姿虎ノ門(口絵)」「讃春(小下絵)」

関連記事

平成13年12月21日 鐺木清方「寿新春・羽子板展」に5組20名(ザ・ファミリー)

平成14年 1月 1日 特別展 寿新春羽子板展～東京下町の風俗を(リビング湘南)

平成14年 1月 1日/2月1日 鐺木清方記念美術館 特別展「寿新春・羽子板展」(広報かまくら)

平成14年 1月 9日 鐺木清方記念美術館 特別展「寿新春—羽子板展」(夕刊読売新聞)

平成14年 1月11日 プレゼント「新春展・寿新春・羽子板展」(新美術新聞)

平成14年 1月15日 鐺木清方記念美術館 寿新春・羽子板展(くらしの窓)

平成14年 1月 鎌倉の節分祭、冬のぼたん鑑賞 鐺木清方と永井周山の名品も(定年時代)

平成14年 2月 4日 鐺木清方記念美術館 特別展「寿新春・羽子板展」(鎌倉朝日)



—清方の情趣—芝居の巻

清方は戯作者の父や芝居好きの母などの影響により、幼い頃から芝居に親しんでいた。その清方が描いた多数の芝居に関する作品の中から、「金色夜叉の絵看板」を中心に展示した。

会期 平成14年2月23日(土)～平成14年4月21日(日)(開館日数:47日)

総入館者数 4,175人(一日平均:88人)

出品作品

【前期】2月23日(土)～3月24日(日)

「菊慈童」「道行浮舟鳴」「寺子屋画帖」「笠の曲(娘道成寺)」「女役者衆八」

「先代萩 一」「先代萩 二」

下絵:「本朝二十四孝」「田舎源氏」「お夏清十郎 4図」「お夏清十郎 6図」

「舞踏道成寺」「歌舞伎の始」「常磐津林中」「高尾ざんげ(『苦楽』表紙絵)」

「吉野山(『苦楽』表紙絵)」

挿絵:「勸進帳」「暫」「早見の藤太」

【後期】平成14年3月29日(金)～4月21日(日)

「深沙大王」「金色夜叉の絵看板」「明治の女」「早見の藤太」「寺子屋画帖(後半)」

下絵:「本朝二十四孝」「雪暮夜入谷畦道 三千歳」「雪暮夜入谷畦道 直次郎」「野崎村」「薄雪」

「朝顔日記」

表紙絵:「葛の葉(『苦楽』)」「道成寺(『苦楽』)」「吉野山(『苦楽』)」「高尾ざんげ(『苦楽』)」

「娘道成寺(『俗曲評釈』挿絵)」

関連記事

平成14年2月12日 鎌倉市鏑木清方記念美術館(海の手 ポスト プレ創刊号)

平成14年2月15日／3月1日・15日／4月1日 「清方の情趣—芝居の巻—」(広報かまくら)

平成14年3月 1日 鎌倉市鏑木清方記念美術館「清方の情趣—芝居の巻—」(江ノ電沿線ガイド)

平成14年4月 8日 叙情豊かな日本画の美に触れる(オズマガジン)



リーフレット

少年時に見た芝居

子供の時分に、考へる芝居の解る筈はないから、専ら眼に訴へる力の強いものが、あとまで憶えに残るのは當然と云はねばなるまい。従つて役者の演技よりも、舞臺面の構成とか、仕掛もの、色どりなどに一ぱん興味を集中するので、云はゞ額縁にはひつた繪の動くのを見る心であつたらう。十九年三月新富座で初演の「雪のだんまり」で左團次の魯知深が賊の二人と舞臺が見えなくなるほど降らす雪の中での大立廻りがあつて、賊の一人が上手の朱塗の六角堂の扉にぶつかると、扉が開いて團十郎の白皙、文身の美しい九紋龍が現はれる、花和尚の代赭色の木菟入との對照はさながら芳年の畫が動き出したやうであつた。

(鏑木清方『こしかたの記』より一部抜粋)